

2022年3月13日 主日礼拝

説教題「愛と平和の神と共に」ルカによる福音書 6章 20～26節

主任牧師 加藤 誠

**「さて、イエスは目を上げて弟子たちを見て言われた。『貧しい人々は、幸いである。神の国はあなたがたのものである。』」(ルカ6章20節)**

あけぼの幼稚園の2月の暗唱聖句は「愛と平和の神があなたがたと共にいてくださいます」でした。2月24日にウクライナでの戦争が始まり、子どもたちも毎日「戦争が早く終わりますように」と祈っています。ある日の礼拝で一人の園児が担任にポツリとこう言ったそうです。「この御言葉を世界中の人たちが知っていたら、戦争は起こらないのにね」と。

ほんとうにそうだと思います。神は「愛と平和の神」であり、人間が命を奪い合う戦争を一番悲しんでおられる方であり、私たちと共にいてくださる方だと知っていたならば、避難する市民に砲弾を撃ち込むことも、病気の子どもたちがいる病院に爆弾を落とすこともできないはずです。けれども、私たち人間はそれができてしまう。ほんとうに悲しいことです。主イエスは「愛と平和の神」が世界中の一人ひとりと共にいてくださることを教えるために私たちの間に生きてくださいました。

今朝ご一緒に開いたのは主イエスの「平野の説教」の冒頭部分です。マタイ5章は「山上の説教」と呼ばれ、山の上で主イエスが弟子たちに教えられた御言葉がまとめられています。ルカの場合は主イエスが山の上から降りて、人々の暮らしのただ中に立ち、弟子たちに教えられた御言葉がまとめられています。どちらも共通しているのは「幸いの宣言」から始まっている点です。主イエスが人びとに伝えようとした「神の国の福音の核心」が「幸いの宣言」でまず示されるのです。またルカの場合は「幸いの宣言」に続いて「災いの宣言」も加えられています。

ただ「幸い」と「災い」という日本語の訳ではどうもしっくりこないし、ピンとこないで、何か良い訳はないだろうかと考えていたところ、「幸いである」は英語では「Blessd」となっていることに気づきました。「神さまの恵みがあなたと共にあります！ありますように！」という意味です。また「災いである」は英語で「woe」という言葉。これは「深い悲しみ、悲痛」をあらわします。だとすれば「幸いなるかな」は「神さまの恵みがあなたがたと共にあります！大丈夫！」という意味であり、「災いなるかな」は「あなたがたはなんと悲しい存在だろう！」と深く嘆いている言葉として受け取れるのではないかと思いました。

また「富んでいる者、満腹している者、笑っている者が災いである」ということもとても分かりにくいですね。「お金を持っていて、満腹し、笑っていたら」、それだけでダメなのか。そんなわけではないはずです。なぜなら主イエスはその直前で「飢えている者は満腹し、泣いている者が笑うようになる」と言われています。「満腹すること、笑うこと」そのものがダメならば、こんなことは言われなくてもいいはず。また五千人の供食の場面でも、人びとは「食べて満腹した」と書かれています。「お

なかっぱいに食べられること」、そのことを否定しているのではないのです。では、ここで「災いだ!」「なんと悲しことか!」と、主イエスが深く嘆いておられるのはどういう意味なのでしょう。

ルカ 12 章に『愚かな金持ち』のたとえ話があります。この金持ちはなぜ「愚かだ」と叱られているのか。それは思いがけない豊作によって大きな富を手にした男が、自分の命も、手の中にある富も、「すべて自分の思いのままにできるもの!」と勘違いし、「飲めや歌え!」「一生楽ができる!」と浮かれていたからです。そうではなく「命も、富も、すべて神さまからのいただきもの」。大切に感謝して受け取り、「この命と富をどのように使っていくべきでしょうか?」と、神に知恵と導きを求めようとしなかったからです。ですから「お金を持ち、満腹し、笑っていること」が悪いのではなく、「自分だけ富を握りしめ、自分だけ満腹し、自分だけ笑い」、神のことも一緒に生きている隣人のことも眼中にない、独りよがりな生き方が「災い!」「なんと悲しい生き方か!」と厳しく叱責されているのです。そのことを踏まえて、主イエスの「幸いと災いの宣言」を次のように意識してみました。

「貧しい者、飢えている者、泣いている者。愛と平和の神があなたがたと共におられる。わたし(イエス)が共に歩む。だから大丈夫。あなたがたは必ず満腹し、笑うようになる。」「自分だけ富み、自分だけ満腹し、自分だけ笑っている者。あなたがたはなんと悲しい存在か。なぜなら、今あなたがたが握りしめている富も、満腹も、笑いも、その手からあつという間に失われる時が来る。人にとって一番大切なものを知らないあなたがたはなんと悲しい存在か」。

富に頼り、富を握りしめている者は、隣人への優しさを忘れ、どんどん神の愛から離れていきます。けれども「愛と平和の神」が私たちに招いておられるのは、それとは逆の生き方です。命は神からのいただきもの。自分だけでなく隣人の幸せを思い、富を分かち合い、誰かの命とつながっていく生き方。そこに神に造られた人間の幸いがあるからです。「命は自分のもの／富を握りしめ／隣人を失う」生き方か。それとも「命はいただきもの／富を分かち合い／隣人とつながる」生き方か。さて私たちの生き方は、主イエスのまなざしにはどのように映っているのでしょうか。「なんと悲しい存在か!」という主イエスの厳しい問いかけは、今日のわたしに向けられている言葉でもあることを、しっかり受けていきたいのです。

一昨日、3月11日の夕方、アジアのバプテスト教会の人びとがウクライナ、ミャンマーのことを覚えて祈る集まりに参加しました。そこでウクライナのバプテスト教会が人びとの避難所として教会を開放し、教会の地下室で肩を寄せ合い避難していること。またポーランドのバプテスト教会はウクライナからの避難民たちを教会に受け入れて、毛布やあたたかい食べ物を提供していることを聴きました。「愛と平和の神」からいただく恵みを分かち合い、今、助けを必要としている人たちと共に歩む。遠く日本において、私たちに今できること、神さまから示されている働きを尋ねながら、世界の人たちとつながり、祈りを合わせていきたいのです。